

論文

満州映画「風はこわい」考

崔吉城

はじめに

植民地と映像人類学に関心を持っている筆者にとって戦前の映像、特に満州映画協会（満映）などが残した膨大な映像は貴重な研究対象である。もちろん筆者だけではない。このような映画に関するイベントとしての研究会に参加した聴衆も増えていることから一般的にも関心が高いといえる。最近それについて研究会が開かれ、また研究書も出版されており（四方田大彦 2001：11-16）、当時の満映の設立やその背景などに関する事実が徐々に明らかにされている。しかしまだ作品の分析には至っていない。満映が国策映画（定義について古川隆久、2003：4-5）であることは間違いないが、作品の質やレベルなどは様々であるので、ひとつの作品を取り上げて分析するのが本稿の主な目的である。

日本植民地において政治弾圧などの政策は良く知られていても、社会福祉などの植民地政策はほとんど知られていない。また研究しようともしていない。ここで分析する映画は 1994 年山口猛監修、テンシャープが製造した「映像の証言満州の記録」（9）の満映啓蒙映画編の中の「風はこわい（原題：可怕的風子）」である。この「風はこわい」は 1943 年、満州国民生部の後援で満州映画協会が製作した作品である。演出は戦後日本映画最盛期の多作時代の時代劇、ヤクザ映画監督、いわゆるプログラムピクチャーの監督であった、大正 5 年神戸生れの加藤泰通氏である。脚本は今井新である。撮影は吉田貞次、音楽は金城聖巻と新京音楽団である。もともと日本語版と中国語版があったが現在は白黒の 14 分の中国語版しか残っていない。

映像の最初に撫順の職員住宅街の全景が現れる。幼女時代をそこで暮らした李香蘭氏の中国大陸の思い出は撫順に始まる。瀝青色の炭屑、貨物列車の行列、遠く鳴り響く汽笛、はるかに霞んで揺らぐ工場の煙、その大渓谷に赤い太陽が沈んでいく。「撫順の夕陽には、露天掘りの宏大な景色がよく似あっ

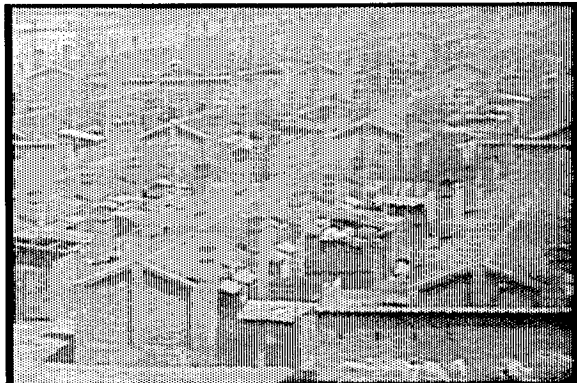
ていた」という（李香蘭 1987：23）。

この映像は文字通り、国策映画としての啓蒙映画である。満州映画を「国策」というならば、その「国」が当然満州国でなければならないが、現在中国が表記するように「偽満州」であって、その国が日本であることは明らかである。この啓蒙映画はたんなる劇映画とは異なる記録映画であり、当初文化映画と呼ばれたものである。つまり民衆を啓蒙する目的で製作された映画である。ところで啓蒙の対象となった民衆とはどんな人々であろうか。狭義には満州国の国民であろうが、広く中国の国民全般を指すのであろう。また日本を含む日本語圏の人々をも対象としているようである。

映画はマスコミュニケーションの機能を持ち、戦前には文化侵略にも使われた。日本は戦前、大東亜共栄圏建設や聖戦などに積極的に協力させるための映画を国策として製作した。当時日本は日中戦争後急速戦争体制になり、軍国主義が強まっていく。これは当然植民地全体に広がっていく。

1 作品の内容

題目「子鼠的怕可」は右から左へ読むようになっている。つまり「可怕的鼠子」（こわい鼠）である。日本語としては「鼠はこわい」になっている。その内容はおおよそ以下のようなものである。



（職員住宅街の全景）

職員住宅街の全景、5個の煙突のある建物が20余戸ある。一個の煙突が一つの世帯と考えると総合して約100世帯、4人家族として計算すれば人口400人程度であろう。

帽子を被り眼鏡をかけて、紙メガホンで何か言っている男の顔がクローズアップされる。

「今日は大掃除の日です。」

男が走りながら叫ぶ。鶏が走って逃げる。

「チフスが流行っていますので、病原菌を振りまく虱を完全に殺さなければなりません。さあ、皆さん掃除を始めましょう。皆さん、掃除を始めましょう。」

それを聞いた三人の男のうち帽子をかぶった一人が

「でたらめを言うな。みんな朝はもう少し寝たほうがいいのに、掃除だつて、そんな慣れないことは絶対できない。ばかばかしい。」

ある女性が外の下水道に汚水を捨てる。

一人が三人の男に向かって、

「おい、虱は汚すぎるよ。掃除しなかったら、俺たちみんな虱に食われる。」

その三人の中の一人が

「いやだ、行こう、行こう。」

もう一人の男が手を叩きながら「そうだな。」

帽子をかぶった男が「そうだ。行こう。無駄話は止めよう。」三人は歩く。

長い髪を三つ編みにした女性、住民の様子が見える。三人の男が食卓に座る。

帽子をかぶった男が「チフスカ！そんなの俺はまだ経験してないよ。虱がいなくなったら、俺は却ってすごく寂しい。そうじゃないか？」

周りの人々が「そうだそうだ！」という。

白（コロモジラミ）と黒（アタマジラミ）の虱の模型図がアニメーションの虱の顔になる。

「そう。あなたたちがいかなかったら、私もとても寂しい。（虱の頭の部分が拡大され鉦の音に合わせ回転する）それに、あなたたちは私たちに血を提供する良い友達でもある。人々はあなたたちを不潔男と言うが、私たちにとつ

てはいい宿で、我々が子孫を繁殖させるいい所でもあるのだ。」

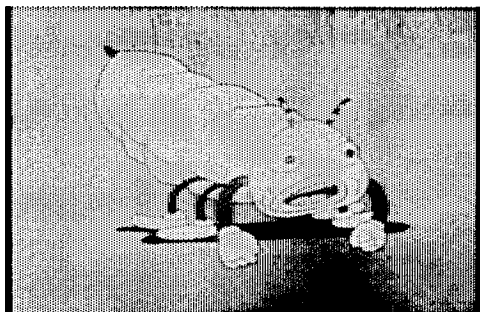
虱がズボンから腹部へ入っていく。アニメーションで1匹の虱が3匹の虱に会う。小さめの虱Aが大きめの虱Bとその他2匹の虱が対置している。虱の実物の映像、アニメの虱が拡大される。

A:「君たちはどこから来たの？」

B:「俺は山東から来たよ。」

A:「体がとても丈夫そうに見えるけど。」

B:「もちろんだよ。俺はしかもチフスを蔓延させる病原菌も連れてきたんだよ。」



(アニメの虱)

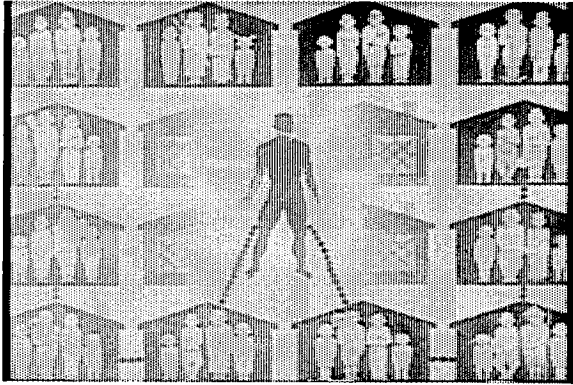
A:「嘘つき!あ？」

Bは病原菌(黒点)がクローズアップされるのを指しながら
「この中は全部チフスを蔓延させる病原菌だよ。」

A:「君は大丈夫だろう？」

B:「大丈夫、俺たちは大丈夫だよ。見て!これが人間の体に移ったらすぐ恐ろしいことになるよ。人間を嘔み殺すんだ。どう?信じる?」

男が痒そうに搔く。黒い点、虱が病原菌を落とす。人々が逃げる。病気の伝染経路図、人体図の心臓が振動する。



(病気の伝染経路図)

その人から4人家族の世帯へ、そして300人ほどの人々が線で繋がる。主人公が寝苦しい様子、雑魚寝している部屋の内部構造が見える。炭鉱地の労働現場で、主人公が作業中にめまいを起こす。前景を動かしたりぼかしたりして表される。倒れ、30人ほどが集まって担架で患者を運ぶ。

夜寝ながら苦しそうに「ああ・・・杜さん、俺駄目だ。ああ……」(人間の絵が表れる)

BがAに向かって「ホラ吹きの間人は口先ばかりだな。見てごらん！卵が生まれているよ。」

男：「ああ・・・ああ・・・」と喘ぐ。

B：「ここにはいられない。俺たちは早く逃げよう。それじゃ、引越そう。」

他の風：「どこに引越すの？」

「とにかく俺たちは汚い所を離れることができない。一緒に行こう。」

男：「ああ・・・ああ・・・」

人々が逃げる。

逃げる人々：「ああ！風に噛まれて死んでしまった。早く逃げよう。」

心臓から血が流れる。患者が精神異常現象を起こして死ぬ。倒れた人、それを運ぶ人、医者などが登場する。

民衆：「また移されたね。」

民衆：「ああ、またチフスカ。このままだと俺たちも危ないぞ。」

「どうしよう？どうしよう？」

「生きたいなら、どうしても虱を殺さなければならない。」

ポスターが現れる。

虱子如同美英
必得打倒

撫順炭鋳

米英を虱にたとえ銃で殺すべきだというポスター。人々が走る。

次には右から左へ書いた「我們要活着非把虱子除掉不可」

アニメーションで虱たちの対策会議が行われる。



(虱たちの対策会議)

A：「えー、皆さん、皆さんにお知らせします。今人類は私たちに戦争を仕掛けようとしています。知っていますか？」

B:「聞くところによると、彼らは蒸気で消毒する方法を使うそうです。」
(蒸気の画面)

C:「入浴する方法で私たちに對抗するそうです。」(入浴の画面)

皆:「それじゃ、どうしたらいいですか?」

D:「大丈夫です、大丈夫です。怖いことはありません。私たちは繁殖の方法で對抗しましょう。私たち虱は一回に何十個もの卵を生むことができます。これは彼ら人類にはどうすることもできないのです。皆さん、
そうでしょう?」

E:「そうだ。そうだ。」

虱はくるくる回転してそして平らになる(死ぬ)。洗濯物を煮沸する、蒸す、洗う。入浴(中国の音楽)、シャワー、掃除、女性たちの洗濯などの場面。皮膚に触りながら明るい表情をする男、健康な住民の行列(軍歌)、数百余名である。(完)

概略は以上である。

2 作品の分析

2-1 製作動機

この映画は、炭鉱地で発疹チフスが発生したので予防のために製作したのではなかろうか。実物を映したものであり、満州映画協作成のものとは違う。この映画から撫順炭鉱では虱が問題になり、キャンペーンが行われ、映画もその現場を中心に製作したことがわかる。あるいは製作のためにポスターを製作したのかもしれない。しかしそれは書き方を逆にするとは考えにくい。確かではないが製作動機を知る上で重要なポイントであると思う。

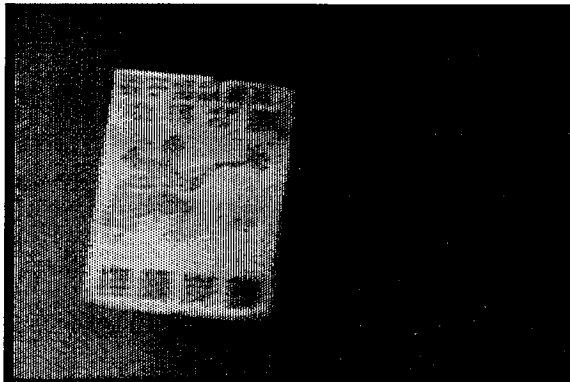
まず気がつくのが中国語版であるから漢字は中国式で表記され、右から左へ読むようになっている。「子虱的怕可」(こわい虱)



(左：表題、右：風を駆除する画像の中間に横に文字が書いてある)

「我們要活非把風子除不掉」(生きたいなら、どうしても風を殺さなければならぬ)

しかし撫順炭鋳のポスターの写真では左から右へ読むようになっている。また米国を中国式の表記で「美国」と表示している。



(撫順炭鋳のポスター)

「英美如同子風」(米国と英国は風のようなもの)

「必得打倒」(打倒すべき)

「撫順炭鋳」(撫順炭鋳)

ポスターの表記が撫順炭鉱製作であることから、炭鉱が虱退治運動を起こしていることがわかる。ただここで打倒すべきものが虱であるか、「美英」（米国と英国）であるかの疑問がある。筆者がこの映画について講演した折、聴衆のひとりから「美英打倒」ということから植民地宣撫映画として位置づけることはどうかという質問があった。だが、考えてみると「美英打倒」という画面はワンカットであり、瞬間であり、視聴者に印象として残りにくいと思われる。虱＝美英というイメージも強くない。炭鉱地では思想運動というよりは虱退治運動のほうがより趣旨に近かっただろう。映画制作は、監督の発案を民生部が採択して行われたと考えれば、撮影許可を得るために監督がこのような思想的なことを製作案にもりこんだ可能性がある。あるいは時代性として当然のことであったかもしれない。

2-2 衛生観念の啓蒙

虱の恐ろしさを知らせ、予防を広めることがこの映画のねらいではなかったか。虱は普通人間に嫌われていたが、人間に付き物のように考えられていた。下着を火鉢の上に広げて動く虱を捕ったり、洗濯をしない冬には下着を脱いで外に置いて凍らせて駆除し、縫い目を歯で噛んで殺すなどの虱取りの習慣があった。この害虫はヒトの体温に守られ、ヒトとともに広い分布圏を持つ虫であり、当時は誰でも知っている普遍的な害虫であった。したがって、主題にしたと思われる。シラミは有史以来、主に医療の場において発疹チフスを媒介する大害虫として恐れられてきた。この伝染病は、戦争や飢饉の貧困がもたらすシラミの多発によって爆発的に流行し、特に戦争時にはしばしば戦局まで左右した。

虱が怖い病原菌を持っていることを「チフスが流行っていますので、病原菌を振りまく虱を完全に殺さなければなりません。」と知らせるが、そのキャンペーンに対して住民は賛同しない。それをこの映画では「でたらめを言うな。みんな朝はもう少し寝たほうがいいのに、掃除なんてそんな慣れないことは絶対にできない。ばかばかしい」「そうそう、行こう、無駄話は止めよう」「チフスカ！ そんなの俺はまだ経験してないよ。虱がいなくなったら、俺は却ってすごく寂しい。そうじゃないか？」「そうそう！」という対話で否定的

な態度を見せる。

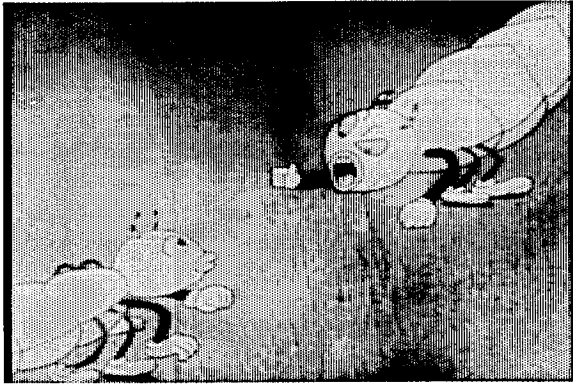
日本も虱の発生においては例外ではなかった。

日本語の虱の語源は「白虫（シラムシ）」といい、昔の女性用の櫛の歯の間隔が極端に狭かったのは、シラムシの卵を漉き取るためであった。また、サルと乞食は虱を食うという。戦時中の学童疎開や、シベリア抑留の時シラムシをつぶしたという話が出る。日本では生活の向上にともない、シラムシは実験材料としての入手にも困るほどになった。1970年代の後半ころから、大都会とその周辺地区の学童を中心に、アタマジラミが流行したこともあった。しかしそれが恐ろしい病気を起こすということは強く意識されていなかった。そこに問題点があった。

つまり病原菌を振りまく虱の保有者が多いが、その怖さを知らない。そこでその怖さを知らせなければならないということが趣旨であろう。「みなさん虱はこんなに怖いんですよ。チフスを発症しますよ。気をつけましょう。」と叫びながら走る。この映像はまず虱に対する科学的な知識を普及させようとする。虱は人体でしか生活できず成虫も幼虫も生涯を人血に依存して生活している。成虫は1カ月ほどの寿命の間に300個ほどの卵を生み、幼虫は吸血しながら3週間ほどで育つ。「人間を噛み殺すんだよ、どう？信じる？」と虱は言う。しかし医学的な治療は省略されている。つまり医学的な治療が目的ではない。虱と発疹チフスの関連性を知らせる衛生観念の啓蒙が主要な目的であろう。この作品は虱が病原菌を持っていることを意識していない人々を科学的に啓蒙することが趣旨であった。「チフスカ！そんなの俺はまだ経験してないよ。虱がいなくなったら、俺は却ってすごく寂しい。そうじゃないか？」というように住民が虱に対して恐怖心がないことを問題にしている。

実写とアニメによって作ったこの「虱はこわい」は教育映画で、発疹チフスに感染した貧民を助ける医師や看護師は「やくざ映画の助っ人のように大げさな音楽とともに登場」する。虱はアニメキャラで出る。白と黒の虱の模型図でアタマジラミとコロモジラミを表し、虱の頭の部分が拡大され鉦の音に合わせ回転する。

太った1匹は山東省から来たという。



(討論する風たち)

なぜ太っているかに関しては、ある講演会で山東省が西洋との貿易の場であり、そこに西洋で栄養を十分にとった風が入ってきたのではなかろうかという質問があった。しかし筆者は山東省が当時旱魃で貧困層が多く、移民や出稼ぎも多かったこと、満州や朝鮮半島まで移住した歴史から考えると、山東省の貧困層に住み着いた風が太ったと考えるのが自然ではなかろうかと答えた。

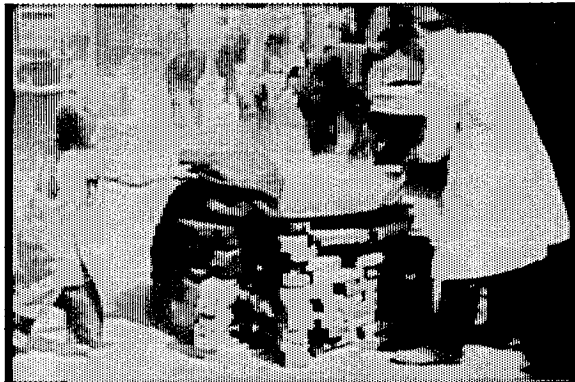
風が病原菌を落として病気が蔓延する。患者や死亡者が出る。人々が逃げる。病気の伝染経路図、人体図の心臓が振動する。その人から4人家族の世帯300人ほどが線で繋がる。主人公の寝苦しい姿、雑魚寝している部屋の内部構造が見える。炭鉱地の労働現場で、主人公が作業中、めまいを起こす様子が前景を動かしたりぼかしたりして表される。倒れ、30人ほどが集まって担架で患者を運ぶ。夜寝ながら苦しそうに「ああ、俺駄目だ」(人間の絵が表れる)。心臓から血が流れる絵、患者が精神異常現象を起こして死ぬ。倒れ、運び、医者などが登場する画面が現れるが、医学的治療のシーンはない。この病に治療は向いておらず、治療より予防が主である。

この映画は満州国の民生部が後援した。その点は注目すべきである。民生部衛生司では直接映画を製作し、衛生思想を宣伝普及した(胡昶、1999:20)。

満映も初期の文化映画においては主に軍隊、産業、観光、特に日満親善にかかわる内容であったが、戦争期になると満州国の政治活動、風物、寺廟、青年、開拓民、旅行、国境、衛生、疾病、廃物などにまで拡大された（胡昶、1999：150）。

民生部は1940年に「ペスト防疫状況」（二巻）、1942年には「細菌和伝染病」（高橋紀監督、大塚新吉撮影）を製作した。したがってこの「虱はこわい」はそれらに次ぐ衛生観念を啓蒙するものであろう。この映画では主に日常的生活改善にポイントをおいている。不潔な日常生活において衛生的な生活習慣を身につけさせようとしている。ある女性が外の下水道に汚水を捨てる。

「大掃除の日」、「皆さん掃除を始めましょう」、掃除などの場面、「入浴（中国の音楽：天上…地上…）、シャワー」、洗濯（煮沸する、蒸す、洗う）。洗濯物を煮沸する、蒸す。これは現在でもロシア等の炭鉱地で行われている。朝鮮では古くから洗濯物を煮る習慣があり、現在でも多く残っている。このような習慣を衛生的な方法として、一般化させようとしている。



（洗濯物を煮沸する様子）

2-3 国策映画として

日本は、ドイツやイタリアでの映画企業の国家統制に影響されて、特に戦争期において宣伝メディアとして映画を利用した。本稿で扱った映画も国民

健康ということで国策映画に結びつくものである（桜本、1993：6、37）。戦場の後方地域の兵站基地と言われた満州において、戦争に物資を普及すべき緊迫な状況で製作者がなぜシラミを主題にしたのか。山口猛氏は「民生部後援による教育映画だが、その国家的意図が無化してしまう作品」、「満州の民政部（？）の意図に沿った明確な宣伝映画に対しても、加藤監督は決してのめりこむことはなかった」「教育映画そのものだが、実際はまったく異なる」、「教育映画の枠を守りながら、好き勝手に撮っていて、文化映画にありがちなナレーションもない」（山口猛、2000：203-208）と極めて示唆的なコメントを行ない、喜劇的な要素を強調している。

しかし、この言葉からも植民地主義を見ることができる。次の3点を指摘できる。

第一は兵站基地としての満州において生産力を上げようとする政策によるものと思われる。炭鉱を舞台にしているが、植民地開拓において炭鉱は重要であった。だが、生産に直接に関わる労働者に衛生問題が発生したと考えられる。労働者たちに寄生する虱によって労働者を失い、生産が低下することがないように啓蒙する点でこの映画は意味がある。

既述したように、この映画は日本資本の代表的な南満州鉄道株式会社（満鉄）の貧しい撫順炭鉱村を舞台にしている。撫順は満鉄による炭鉱の発展と共に大きくなり、1930年頃には人口が30余万の満洲でも有数の都会になっていた。そして約2万人の日本人が住んでいた。露天掘りには山東省から来た苦力（クーリー）が多く労働していた。虱が「俺は山東から来たよ」というのは、労働者の多くが中国の山東省から来た苦力として移動して来た者であったということを意味している。この映画には彼らを主に出演させた。

労働環境は悪かった。画面で見ると男性だけ雑魚寝をするなどで虱が繁栄して病気が伝染することが問題であった。画面では露天掘りの山と山の谷間が舞台になっており、20余棟の職員住宅が図で示されている。一つの棟に5個の煙突があり、4人家族として計算すれば約100世帯、総合して人口400人程度である。この図が線で繋がるのは虱が伝染して広がっていたということを示す。つまりこれは虱のいない家や人はないことを示し、全住民に伝染することを示している。

第二は撫順炭鉱のキャンペーンのポスターに「虱子如同美英」と書いてあるように美英つまり米国と英国に向かって戦うこと、戦争勝利の宣伝映画ではないだろうかということである。満映にはナチスドイツを支持する映像や、また教材映画「こども満州」ではドイツの戦車が敵を爆破する場面が紹介されていた。米英を虱に例えたことは当時の状況から十分納得できる。

しかし「虱子如同美英、必得打倒」「我們要活着非把虱子除掉不可」の画面は数秒に過ぎない。視聴者がほぼ注意を払えないほど短い。そして全体が啓蒙映画としており、米英が標的ではない。したがってこの映画では米英が虱に例えられたことは、撫順炭鉱のポスターを取り入れただけに過ぎないのではないかと思われる。

第三に、山口猛は七三一部隊関東軍細菌部隊の人体実験撮影に協力したこともあり、カメラマンがペスト菌に犯されたことがあったという(山口猛、2000:201-203)。部隊は細菌の培養を手がけていたため、このことをきっかけに、監督がこの映画の撮影を手がけたとする見方がある。だが、技術提供はあっても直接にこの映画を作る動機になったかは、慎重に検討すべき問題である。

結 論

日本植民地において、武力による弾圧と同時に開発政策がとられたのは事実である。そして日本映画はイデオロギーの強い風に揺れてきた。しかし多くの映画人にとってそのイデオロギーをそのまま明確な思想として育んだとは思えない(岩本憲児、2004:310)。その解釈はいろいろであり、研究さえ十分ではなかった。たとえば韓国では「略奪のための開発」という図式があり、積極的に研究されていないのが実情である。植民地史の研究は多くてもほぼ独立運動がその中心になっている。開発や社会福祉に関する研究は、「国学」学者や学問以外の人に非難されやすいので禁忌領域となっている。本稿は植民地時代の国策映画の一つを対象にして分析した。したがって本稿はそのような視点からの研究の第一歩であり、今後分析を続ける必要があらう。

ちなみに筆者がこの映画に関心を持つようになったのは、1920年に朝鮮で「虎熱刺(コレラ)」という映画が大人気を呼んだことにある。そのこととこ

の映画とに連関がないだろうか考えた。1921年、韓国の最初の劇映画とされている貯蓄宣伝映画の「月下の誓い」より1年早く、コレラ予防の宣伝映画「コレラ（虎熱刺）？人生の悪鬼？」（1920年作題名は不詳）が作られた。朝鮮総督府京城府と京畿道衛生課の委嘱により2巻作られたが、朝鮮人だけではなく在朝日本人も啓蒙するものであった。1920年7月30日当時全国で1,580人のコレラ患者がいた。

内容は医師や官吏がコレラの怖さを知らせて、患者の苦しむ光景と消毒する場面が描かれる。そして興味を引くために妓生を登場させたり、西洋コメディを入れてしたりした。この類の映画はほぼ日本から持ち込まれるものだが、この映画は当時すでに朝鮮人劇団があったので、総督府が委嘱して製作したようである。衛生的家庭とそうではない家庭とが対比されている。衛生観念のない人が不潔なラムネを飲んでコレラにかかってシャーマンを呼んで儀礼をしたが、患者は死ぬという内容も含まれていた。

しかしこの映画にはいくつも題名があり、不詳であるので、このような映画は数編製作されたかもしれない。映画館で上映してから公会堂、小学校の運動場、公園などでも上映された。1日1万人を動員するほど人気があり有料にもなった（キムジョンウォン、2001:63-74）。「虱はこわい」の製作者がこの事実を参考にしたかどうかは確かではないが、植民地において啓蒙的な政策をとり、このような映画を製作したのは間違いでないだろう。

本稿では国策映画としての製作動機について分析した。ただ英米を虱にたとえ殺す場面を除いては衛生観念の啓蒙のために作られたことがわかった。つまりこの映画は啓民を目的としている。

この映画は軍国主義イデオロギーの強い時代に国策映画として作られたものであるが普遍的作品であり、当時ならどこの国で上映しても受け入れられるものである。本稿では、移動映写会などの活動によって広く上映されてきたことには触れることができなかつた。しかし、筆者にとってこの映画は植民地時代の国策映画といってもすべて植民地イデオロギーだけで説明し尽くせないという点で継続して分析することの励みになった。

参考文献

- 岩本憲児、『映画と大東亜共栄圏』森話社 2004
胡昶・古泉著、横地剛・間ふさ子訳、『満映』パンドラ 1999
桜本富雄、『大東亜戦争と日本映画』青木書店 1993
古川隆久、『戦時下の日本映画』吉川弘文館 2003
山口猛監修、テンシャープ製造「映像の証言満州の記録」(9) 1994
山口猛、『哀愁の満州映画』三天書房 2000
山口淑子、『李香蘭私の半生』新潮社 1987
四方田大彦、『李香蘭と東アジア』東京大学出版会 2001

- 김종원/정중현, 『우리 영화 100 년』 현암사, 2001
(Kim Jyonwon・Jyonjunhon, 『わが映画 100 年』玄岩社 2001)
최길성, 「일제시대 영상을 통해 본 한국」 『한국민속과 동아시아』 민속원
(崔吉城, 「日帝時代の映像を通してみた韓国」 『韓国民俗と東アジア』民俗
苑 2004)

* 謝辞

本稿は 2004 年度の広島アジア塾公開講座において「映像から見た北東アジアの植民地」という題で発表し、質疑応答したことを参考に構成したものである。塾長中山修一先生をはじめ公開講座の参加者に感謝します。

また本稿の作成において中国東北地域にある長春大学日本語科の教員で、現在広島大学大学院国際協力研究科の留学生の孫蓮花氏が日本語に訳してくれたことに感謝する。さらにコメントなどをしてくれた県立広島女子大学の上水流久彦氏に感謝する。

(dgpyc081@yahoo.co.jp)